

甲・乙は野戦工兵で馬はないから、全部担がなければならぬ。

丙・丁は舟艇、戊は鉄道（線路）と思う。車両は配属輜重がある。

工兵は土工が多いので、以前の職業から入れ墨をした者が多い。その者には、「親からもらった大事な体に彫り物をするとは何事ぞ」と叩かれます。しかし軍隊で教育されますと、まじめ人間となって帰って行きました。

爆薬は野戦工兵です。対戦車の爆雷は支那事变当初は、アンパン型でしたが、その後は亀の子型の破甲爆雷が使われていました。亀の足型の所が磁石であり、戦車の鉄板に密着し爆発、戦車の中部まで破壊させます。

その後、対戦車用の爆雷は次々と新しい考案がなされていくと聞いています。

## 初陣は常德殲滅作戦

岐阜県 道下 政太郎

私は、二十八歳の補充兵として、第三師団輜重兵第三連隊に召集され、中支の本隊に入隊しておりました。昭和十九（一九四四）年秋近いころ「極秘だが、十月十三日ころには〇〇方面に向かって作戦行動が開始されるらしい」と、噂から噂が流れて来た。そして、各班とも次第に作戦準備に多忙になってきた。

作戦が始まれば、輜重兵は特に忙しくなる。山岳地帯は駄馬により任務の輸送となるので、駄馬の調教をしなければならぬ。日本馬は少なく、将校の乗馬である。その他、人事及び功績の駄馬くらい、他はほとんど蒙古馬及び中国馬である。比較的使い難い。中でも我が分隊の「北京号」等は嘔む、ける、荷を積載すれば荷が落ちるまで跳ね回る。駄馬輸送の御兵も決して楽ではない。

「北京号」なる暴れ馬には、至って元氣者の酒井辰三上等兵である。この「北京号」なる中国馬に作戦出發一週間前から昼間五〇キロ土囊二俵も積載して荷物に慣れさせた。他の馬にも鞍下毛布を置き、鞍を載せ、荷物を載せる等して慣らすよう、兵は何かと忙しい。

十月十日夜、私は第三分隊すなわち重機分隊へ、今作戦中軽機関銃弾薬手として勤務との命令がきた。鈴木第四分隊長は独り言で「道下は体も大きいし、丈夫だから、俺の分隊で十分働いてもらおう予定だったのに」とぶつぶつ小言を言っていた。

第四中隊より後藤孝一上等兵が同分隊に軽機関銃の射手として転勤してきた。自分は軽機の弾薬手、つまり後藤上等兵と共に軽機関銃を命として常徳殲滅作戦に参加することとなった。

十月十三日、いよいよ常徳殲滅作戦の行動は開始された。自分には生まれて初めての作戦参加である。人も馬も作戦に対する完全武装をして足の運びも軽々と

出動した。自分も軽機関銃を担いで出発した。行動開始二日目からは雨となり、土砂降りである。揚子江の上流といえども川幅は二〇〇メートルくらいはあるだろう。向こう岸に渡らねばならないが橋がない。荷物は船で、どうしても馬は水馬より他はない。大変なことだ。私のように山家からの出身初年兵には水馬どころじゃない。何度か作戦に参加し、水馬によく慣れた古兵達に頼る以外に方法はない。ましてや敵地の中の渡河点となれば、兵馬は集結する。爆撃等をするにはもってこいの状態なので、夜陰を利用して渡河をするのである。

古兵達はねじり鉢巻に越中ふんどしの素裸である。

軍馬も泳げる馬のみが兵と一緒に水馬する。兵は裸馬にまたがり、浅瀬の馬の歩行できるうちは乗って、いよいよ馬も歩行できなく深瀬となれば、兵は手綱と馬のたてがみを左手に巻き、馬の右側に降りて右手で水をかき、人馬一体となって上流に向かって斜め下の対岸に懸命に努力しながら泳ぎ着くのである。泳げない軍馬は船二隻を並べ、離れないようしっぴかり結び付

け、船の上に板を敷き並べ、その上に兵が乗り、船の片側に四頭ずつ合わせて八頭を繋ぎ、耳に水が入らぬよう頭を船辺高く引き上げ、泳がせて対岸に船頭が漕いで渡すのである。

兵員一五〇〇人、馬約九〇〇頭の多数の人馬を渡河完了するには一晩中かかり、夜明けまでによりやく終了する。この渡河点にて静岡県出身の加藤友吉一等兵の愛馬の「一戦号」なる馬と水馬の途中、川の真ん中で愛馬

「一戦号」が水泳に疲れ切つて遂に川の流れに沈んでしまい、尊き軍馬一頭犠牲になり、加藤一等兵も馬もろとも水中に引き込まれ、今にも水死するところだったが、彼は静岡の浜の漁師なので、幸いに動作も早く泳ぎ上手なのでこの危険を免れ、元の岸に泳ぎ戻つてきて、大沢治郎小隊長に涙ながらに報告していた。

第一の渡河点も敵の襲撃もなく無事終了し、近くの民家に宿営した。自分達本部警戒隊も本部護衛の任であるため、いつも本部より五〇―一〇〇メートルくら

い前を前進する。重機関銃一、軽機関銃一、迫撃砲一、擲弾筒一、小銃兵数十人が兵力である。

行軍は普通四キロ行軍である（すなわち四キロを四十五分で歩き、残る十五分は小休止なのである）。行動開始三、四日は誰もが元気であるが、五、六日と続く夜行軍に皆疲労して、隊の行動が乱れてくる。古兵に気合を掛けられながら、疲れた重い足を引きずりながら歩む兵もポツポツ出始めた。

遙か遠くでドーンドーンと友軍の撃つ山砲兵の友軍援護射撃の音が聞こえてくる。二躍進三躍進すると、彼の山砲の音が間近から撃ち出すようだ。また、パンパンと小銃の音。バリバリと豆を煎るように撃つ機関銃の銃声。生まれて以来、敵と交戦（実戦）等したことがなかったので「いよいよ第一線に立つんだ。大変だ」と思った。命と命との引き替えだ。何くそやるぞ！との気分になった。

我々輜重隊は第一線の戦闘部隊ではない。第一線の戦闘部隊にいかなる危険をも顧みず、兵器、弾薬等を交付するのが任務である。たまには敵弾飛び交う下で

弾薬等を交付しなければならぬことも幾度かある。頭上を敵弾がピューピューと通る。その度に自分達は頭が下がる。頭上五、六メートルくらいを通るのである。時折パチッパチッと弾丸が通る。これは初めての至近距離で伏せの姿勢を取らねばならない。また弾丸がピューと通る。すぐ後方を見ると五〇メートルくらい後方の松の枝に当たりパシッと折れて落ちた。余りの弾丸の強さと早さに驚いた。

かくして今日の弾薬の交付は幸いにも一人の負傷者も出ず無事終了した。後方からトラックで輸送してくる地点まで受領に行かねばならない。つまりピストン輸送である。受領すれば直ちに命令のままに第一線部隊まで追及せねばならない。第一線の戦闘部隊が敵前において弾薬の乏しくなった時ほど、身の危険を感じ心細いことはない。このような時は六キロ行軍で走るように進撃しなければならぬ。またある時、敵前の友軍が弾丸がほとんどなく、極めて危険な状態であった。時を待たず急いで交付したとき、涙を流して喜

び、手を握って泣いた兵隊もいた。そして我等を神様のように拝んだ。本当に第一線の歩兵部隊はご苦労様である。いかにお国のためとは言いがた、この状態は筆舌で表すことができない。

誰かが歩兵部隊は消耗部隊という。余りにもふざけた言い方である。彼らが命をなげうって第一線で戦ってくれてこそ、我が軍の勝利なのである。彼らの後ろ姿を第一線に残し、御苦労を感謝し、武運長久を祈りながら次なる任務に引き下がって行動する。また、道も分からない任地へ将校らは懐中電灯で参謀本部の地図を頼りに進む。かの広い大陸にてよく間違えず、部隊を誘導できるものかとつくづく将校さんの任務を感じた。

十一月も終わるころ、揚子江上流の民家に宿営したが食糧はほとんどなく、対岸へ物資を探しに行った。持っていたゴム製の舟に空気を入れ、細いカイで対岸に渡ろうとしたが、川の真ん中まで来たところで、カイの柄が折れ、川へ流れてしまった。残るカイも折れて

しまった。

舟は川下に押し流され、二キロ下流は敵中である。折しも工兵隊が川半分ほど架けた橋の下を舟がぐぐり抜けようとした時、私は橋に飛びついた。橋に上がろうとしたが上がれない。足は水に流されているし、体の重みで手が抜けそうになる。

大声で「助けてくれー！ 助けてくれー！」と助けを求めたら、民家にいた戦友三、四人が「オーイ！ しっかりしろ」と叫びながら飛んで来た。しかし、その時間が長かったこと、やっとで助かった。他の二人は川下へ、それは幾人かで戸板を筏にして、ようやく助けてくれた。命からがらの大失敗であった。

戦闘は何といっても重火器が先頭一番だ。素早く我が大野重機分隊長は射撃場所を選定し、重機関銃を整備、据え付けた。弾丸も一〇〇発装填のチェーンの取り付けに手際良く動作している。後藤上等兵と自分は軽機関銃なので簡単に取り付けた。石垣の凹みから敵を狙う。弾庫盤に一八発装填してスピンドル油を注入し、軽機に装填する。狙いは敵重機である。重機と軽

機と交互に射撃する。我が方に弾丸が余りにも集中されるので、暫時射撃を休めて銃口を冷やし、敵弾の命中を試すことにして、自分の鉄帽を脱いで銃剣の先で石垣よりそーっと三〇〇センチ程度差し上げると、その鉄帽に敵弾がカチンカチンと命中する。余りにも上手で正確なのに驚いた。自分達の応戦している石垣の下は岸壁。その下は川原である。その岩陰から「誰か助けてくれー！ 頼む！」と叫ぶ味方の兵の声。微かに見下ろせば、顔中血ダルマになって叫んでいた。

戦闘は、こちらが重機で射撃すれば敵の重機は休む。交互に休み、間断なく射撃するということは滅多にない。かようなことで大野重機が射撃するその隙間、血ダルマの兵が這い上がってきた。その兵は中隊より来ていた柴田軍曹であった。彼の鉄帽は撃ち抜かれ、中で弾丸が鉄帽と頭の間をクルクル舞い、外に飛び出していったのであろう。頭の皮と毛を弾丸でむしり取られた傷から血が流れ出ていた。幸いに頭を貫通銃傷でなくて命に別状はなかった。早速包帯を取り出

して仮包帯をした。

今度は自分達軽機の射撃の番である。後藤上等兵は射手、自分は弾薬手で、後藤上等兵は敵中日がけて真剣に射撃する。余りにも射撃に夢中になったのであろうか、石垣よりちよつと乗り出し過ぎたのであろう。

自分の左耳のすぐ側、一〇―一五センチ、至近距離を敵弾が通り抜け、バチッと耳が痛い。ツーンと耳が聞こえなくなつてしまつた。余りにも耳が痛い。耳がちぎれてなくなつたのかと思ひ、瞬間耳を掴んだ。幸い耳はあつた。その弾丸で後藤射手が「ガガア」と声を立てて後に倒れた。自分は、アッ！しまつたと彼を見る。鉄兜に真綿の白い花が一〇センチ位の大きさに飛び出してゐた。

彼は「道下、やられた！ 傷はどうか」と叫ぶ。早速鉄兜を脱いでやつたその瞬間、自分はグーッとした。それはそのはず、彼の薄桃色の血に染まつた脳味噌が茶飲み茶碗ほど飛び出している。頭を直撃されたのであろう。後頭部の小脳だったら即死なのに大脳だったからまだ正気である。彼は傷はどうかと叫んだ。

だ。戦いの合言葉ではないけれど「後藤殿、傷は浅い、しっかりしろ！」と言つたけれど、到底助かるはずはない。大声で「後藤がやられた！ 誰か早くきて！」と何度か叫んだ。余りにも敵弾が激しく、誰もが出られない。来てくれない。大野重機は必死に応戦している。早速、後藤殿の包帯を取り出し三角巾（軍服の前下のポケットにある）で仮包帯をした。

自分一人ではこの負傷兵を裏山に待機している衛生隊に運ぶことはできない。五、六メートル後方の墓地に隠れている伊藤兵長も出てこられない。一〇メートル後方の大沢治郎小隊長が勇猛にも匍匐してきてくれた。大沢小隊長は後藤殿の頭を両手で持ち上げ、自分は腰を抱えて持ち上げ、引きずるようにしてどうにか裏山（高さ二〇メートル位の山）に待機している衛生隊に引き渡した。その時間一〇分位かかったらうか。後藤上等兵、もう駄目だと思つたのか、小さな声で「おっ母さん、おっ母さん」と二、三度叫んだ。無念や彼は遂に帰らぬ人となつた。実に壮烈な戦死を遂げた。

「戦の最中ではただただ君は逝ったか。俺もやがてか君の後を追って逝くであろう。許せよ」と合掌もそこそこに小走りに元の戦闘の位置に戻った。大野兵長は重機にて頑張って応戦している。無二の戦友を射殺された自分は鬼人になり、男の意地も盛んであった。後藤と二人分の弾薬もある。後藤の敵は必ずとってやる。「一人で二人分やるぞ」と一人弾を込め射撃した。遮二無二応戦した。誰かが「道下、無茶するな、もう止めろ」と叫んでいたが、「何くそ!」と耳にも入らない。撃って撃って撃ちまくった。

いかに応戦しても敵には通じない。多勢に無勢か。我が方にどうしても勝利はない、と見たのであろうか、指揮官より応戦止めろとの命令。無念で致し方ないけれど涙ながらに射撃は止めて、その陣地を引き揚げることになった。我が部隊はこの渡河点を渡り、対岸道路にて進撃する予定だった。敵もその旨を知ってか死守したのである。この戦闘はすなわちシツカ川の戦闘である。やむなく我が部隊はこの渡河点を諦め、十数キロ川下で渡河したのもその翌日であった。

次は山また山の山岳行進である。昼は眠なく敵機が飛来する。我が輜重隊の駄馬行進はとて長い。全長二〜三キロもある。先頭から後尾まで敵機が発見されやすいので絶対油断はできない。かようなことで部隊は夜陰に乗じて行動する。午後六時に行動開始、翌朝六時ころに行動を中止して、付近の民家または山林寺に宿営する。昼夜激しき苦難等乗り越え任務を死守しつつ、目的地洞庭湖の対岸なる常德へと進撃する。洞庭湖は長さ一三〇キロ、幅三〇キロ余ある。(蔣介石の将校は、この湖を渡れば日本に着くと兵士に言ったとか。笑談かも知れないが)

十一月のある夜、友軍に弾薬等を交付した。敵前においての交付である。絶対に油断は許されない。少しの油断等があつては一大事。焚火は小さく暗い中での交付である。一キロ先方では友軍の戦闘銃声の音が激しく聞こえてくる。少し後方よりは野砲兵が歩兵部隊に援護射撃する砲声がドーンドーンと聞こえた。

その後、何回か資材・弾薬をピストン輸送をし、交

付などをして、ようやくして常徳市近くに到着したのである。常徳は中支屈指の重要な工場地帯と聞いている。その軍需工場等を撃破し、攻略するのが目的だという。戦闘は極めて激しくなり、彼我の死傷者も激増していると聞いた。

我が軍の猛撃で敵も戦友の死体を収容できず、そのまま無数の死者が横たわっていた。我が軍の衛生隊も二十五人一個分隊で、一〇〇余人の負傷兵を収容していた。野戦病院といっても名ばかりで、我々と一緒に行動をしていた。この一個班員で班内の食糧から患者全員までの食糧までほとんど徴発にかかっているのだから、集める我々も、押収される敵方も大変なことである。

患者も敵弾にて負傷の一等症患者は、傷の程度によって担架あるいは支那現地徴発馬、またはロバ、ラバ等で運ばれ、後送される。他の病気の二等症患者はほとんど歩かされる。自分の身の回りの品々等は自分で背負う。重病人となれば、ただ水筒と飯盒のみで、その果ては栄養失調となり、フラフラと生きも絶え絶

えに、やがてはかわいそうに倒れ、空しく第一線の土となる。哀れというも、余りにも無情である。かようにして戦病死する兵士も多い。第一線の戦死者の遺体は近くにて火葬にするか、その暇のない場合は、彼の手の一部を切り取り、他は近くに土葬（土埋め）にして、包帯に包んで持ち帰った一部を静かに火葬して煙草の空等に入れ、戦友が首に掛けて携行する。第一線の遺骨は命をかけて守り続けた。中には二体くらい首に掛けていた兵もいた。

今日も相変わらず常徳攻略目指して我が第三師団、すなわち幸部隊は、師団長・山本光男陸軍中将閣下の命令一下、部隊行動は激戦に激戦を続け、犠牲者の出るのも皇国のため、誰一人愚痴を言わない。死ねば九段の花と咲く、命を捧げて戦うのみであった。砲声が間近に轟き、歩兵部隊の撃ち出す機関銃の銃声、散兵線の銃声、敵の銃弾が限りなく顔の上を通り抜ける。危ない時の神頼みか、日ごろ出ない念仏もこの時ばかりは自然に出てきた。

今夜九時ごろに第三師団本部が川を渡河し、対岸に渡れるから、特に対岸方面は敵状が悪いので、我が輜重隊に渡河援護に出動し、警護の任に当たるようにと師団から連絡があった。輜重の本部ならびに各中隊から一〇人、連隊本部からも一〇人、その中に自分も加わった計五〇人集合し、その指揮官として第四中隊の目方准尉がその任に当てられた。渡河点に来て見れば、対岸に渡し舟は一隻もないので、近くの要所要所を探してしばらくして引張ってきた舟が随分と古い屋形舟である。到底五〇人も一度に乗船し得る舟ではないので、目方指揮官は二十五人ずつ二度に渡河するように命ぜられたが、極めて敵状の悪いところなので、誰もが先に乗って後に残りたくないの、いつの間にもやら五〇人全員、この古い危険な舟に乗り込んでしまった。

やむなく船頭になった兵が対岸目指して漕ぎ出した。川幅は一〇〇メートルほどの川の真ん中ころまで行った時、舟の底が抜けてしまった。誰もが慌てふためいて岸に向かって暗闇の中を泳いだ。

揚子江で、もし川に落ちたら箸一本でも持って浮くように注意せよ、と上官から訓示されたことを思い出し、屋形舟の屋根に用いてある太い竹の棒を無意識のうちにつかんでいた。そして、どうにか元の岸に泳ぎ着いて陸上に上がった。そのころ師団がこの渡河点に到着した。この有様で驚いたのは師団の先行隊である。早速、我等の救援で大変なことになった。師団は急いで夜の明ける前に渡河せねばならぬので、この救援を我が輜重隊に連絡し、輜重隊の援護によって救援は終わった。

師団は通過したが、我等は師団の渡河援護どころか、かえって助けてもらった有様で面白くない。五十人の援護兵を点呼したところ、生ける者二十五人。そして後の二十五人の幾人かが「オーイ！ 助けてくれー！ 助けてくれー！」と声もほそぼそと叫ぶが、闇夜に無灯火でどうすることもできない。いつの間にもやらシーンとして夜となってしまった。哀れにも二十五人皆沈んでしまったのであろう。

私はこの災難から辛うじて助かった。有難いと心か

ら神仏に感謝した。沈んだ戦友の引揚げ作業も敵前、真夜中でどうすることもできない。やむなく明朝早々より引き揚げの搜索をすることとなった。我等二十五人は本隊に連れ戻り、体中ビショ濡れであり、秋の極めて寒い晩である。体中ガタガタふるえて歯もガチガチする。皆さんに火を焚いてもらって温められ、衣類も乾かしてもらった。

火端でトロトロ眠っている間に早くも夜が明けた。

いよいよ夕べの渡河点にて沈んだ戦友の引揚げ作業となったが、何一つ川揚げの道具とてないので、四メートル位の竹竿の先に鉄切れのL字形のカギを作り、結び付けて作業に当たった。目方准尉は対岸よりわずかに四、五メートルのところ沈んでいた。水死者も十五、六人は早めに引き揚げられたが、後の十人ほどは容易に捜し揚げられず、どうにか夕方三時頃までに十五人全員の死体が揚げられ、戸板に並べられ、人名階級等が確認され、その場において火葬された。涙ながらに合掌した。自分もひよっとしたらこのようであったかも知れぬ、と想像し、身の縮む思いがした。

堅固な守りの常德は容易に攻略できないので、第三師団は総攻撃をする、市の周囲に大小の燃料タンクが林立している。それに我が山砲の撃ち出す砲弾が命中し、一大火柱が各所に天をも焦がすがごとく燃え上がっている。また、四方より我が第三師団が包囲し、一兵たりとも逃すまいと彼我の白兵戦である。

かくして市街戦は幾日か続いて我が軍の熾烈果敢な攻撃により遂に常德は殲滅され、戦いは我が軍の勝利となり、兵は勇み立ち、中には戦友同士が抱き合って喜び泣きに泣いた。しかし反面、敵の市街地の建物はメチャメチャに破壊され、かつ焼け果て、見る影もない。戦争とはいえ、余りにも無惨である。大震災の後のようなのである。なんだか胸がいっぱいになってくるのもどうしようもなかった。心の中で合掌するのみ。

この常德も二度と立ち上ることのできないまでに殲滅した。戦いなるものは目的地向かって敵の守る中を激戦に激戦を続けて進撃し、目的地に達し目的を達するのである。船に例えば、向こう岸なりに海水または波を打ち分けて進む。通った後はまた波も静ま

り、元の海となる。帰るときはまた海水を分けて元の港に帰るようなものである。

かくしてまた、夜陰に乗じての反転となる。相変わらず後から追いかけてくる敵と交戦しながら、先に来た道を帰る。その部隊の行動は蛇の皮を剥ぐように後が前になり、後が前になりして、絶対油断することなく進む。軍公路を部隊は通る。道路の両側五メートル置きに歩哨が立ち、部隊行動を守る。自分もその歩哨の任に就いた。辺りは真つ暗である。遙か後方にポカッポカッと火が見える。ちょうど敵の銃火のごとく見える。そしてバタバタと兵の歩く音がする。敵兵が夜陰に乗じて我が軍を後ろから狙撃する火のようである。第一線で敵味方の分別がつかない時は、必ず二、三秒置きに「誰か、誰か」と三度誰何する。その返答のない時は、すぐ発砲・射殺せよ、となっていた。

この常德殲滅作戦も行動開始以来約三カ月、昭和十九年一月に懐かしの駐屯地応山に幾多の犠牲になった戦友（遺骨）と共に帰ってきた。自分は幸いに負傷一つする事もなく、無事、作戦を終えて嬉しかったけれ

ども、帰らぬ戦友を偲ぶとき、極めて胸が痛くなり、寂しくてならない。翌日より衛兵に就く。門衛兵または遺骨衛兵に就く兵、中でも遺骨衛兵が一番辛かった。

ありし日の戦友の全てが脳裏に浮かんで、五寸四角の小箱に納められ、幾段か数十人の遺骨一箱一箱が五尺余寸の大なる兵士であると思えば、今にも何か語り掛けてくるような気がする。いかに国のため、東洋平和のためとはいえ、余りにも無情である。心の底より戦友のご冥福を祈り、体中カチカチの姿で捧げ銃をし、ジーンと遺骨に黙禱するのであった。

### 【解説】

常德は「湖南捻れば四川は飢えず」と中国では昔から言われた湖南省の、東部の長沙に対し、西部に於ける軍事、政治、経済の中心地であった。従って、蔣政権の本拠とも言うべき四川省、重慶軍の補給の命脈と言われる都市であった。

従って、支那派遣軍が度々長沙作戦を行ったが、十

分の戦果を挙げていなかった。そのため、今後予定されていた、大陸打通の湘桂作戦を成功させるためには、長沙、衡陽を、そして西方四川省東境をうかがって、敵本拠地重慶に対し戦略上の脅威を与えるため、常德は重要な押えの必要な地点であった。

作戦は概ね順調であったと言えようが、常德では予想以上に敵の頑強な抵抗を受けた。中国軍としても、常德落ちれば「四川危うし」ということであるから、当然、激戦が続行するのは当然であつたらう。

また、第十一軍反転開始前後から、常德確保あるいは再占領すべしとの問題が起きたという。支那派遣軍総司令部、第十一軍間の不一致を来たし、統帥上の問題にまで発展しそうになったが、総軍・軍双方それぞれ努力により事なきを得たという。

総司令部は、常德・広徳両作戦において、第十一軍・第十三軍を指導しつつ、常德作戦実施について大本営の認可を待っていたところ、昭和十九年九月二十七日、左の命令が発令され、その実施を認可されたという。

大陸令第八百五十三号（九月二十七日）

一 支那派遣軍総司令部ハ現任務遂行ノ為中支那方面ニ於イテ一時作戦地域ヲ越エテ作戦ヲ実施スルコトヲ得。

二 細部ニ関シテハ參謀総長ヲシテ指示セシム。

（総長指示はこのとき特に発令されていない）  
このような、最上層部であつたことなど、現地部隊長など知る余地もない。特に、末端の一戦部隊の下級將校以下知る由もなく、ただ、黙々と作戦準備をし、作戦に参加したのである。

## 中支常德作戦

### 城内突入の戦い

香川県 山地 豊重

私は昭和十七（一九四二）年七月、歩兵第二三四連隊第二機関銃中隊へ補充兵として入隊した。

当時、湖北省の長沙街道沿いの鯨部隊守備陣の最右